ハイパーテクストとポストモダニズム

石　木　利　明

T. S. エリオットの *The Waste Land* の複雑に入り組んだ引用・参照をハイパーテクスト化した *Unreal City*[1] を読む体験は，われわれの読みの欲望のありかたが，いかにハイパーテクストを求めていたかを知る体験であると同時に，われわれの読みとテクストとの関連を再考する体験でもある。

The Waste Land は，第一次大戦後の現代社会と聖杯伝説を中心とした様々な神話世界とを，綿密かつ錯綜するアリュージョンで結びつけている。そもそもそういう意味でそれ自体ハイパーテクスト的といえる *The Waste Land* のハイパーテクストは，そのリンクのしかたを視覚化することで，読者がエリオットの意図通りに読むことに貢献している。しかし，このとき視覚化されるのは，エリオットが意図したテクスト間の結びつきだけではない。

互いに関連し合うテクストのウィンドウを開いてゆくと，オリジナルのテクストは，他のテクストと並置されたり，後景に隠れたり，また前景に戻ることを繰り返す。エリオットのコントロールによって引用され，暗示されていたはずの諸々のテクストは，もはやエリオットの *The Waste Land* というテクストの内部にエコーしているというより，読者が次々とリンクを辿り―つまりコントロールしながら―オープンしていった諸テクストが並び合い重なり合うコンピュータのスクリーンの上にこだましているという感覚に襲われる。エリオットが意図したエコーが消え去った後にも，それらは響き合っている。(Fig. 参照)

このとき読者が読んでいる「もの」はいったい何なのか。読者の読みの対象は，もはや境界を定めることが困難になった〈エリオットのテクスト〉というより，読者が自ら入り口を選択し，自らの意志で呼び出し，配置し，構成していった読者の前に表示されているスクリーンではないのかという感覚を，このとき読者は享受する。読者の読みが原テクストから逸脱してゆく感覚は，さらに，このスクリーン上に展開されたテクスト群に読者が自分の書いたテクストを接合できる可能性によってますます強められる。読むことが書くことに引き継がれ，それまで読んできたテクストを，読む行為の結果によって読者自身が拡充しているという感覚が生じる。

著者の語りの順序，論理構成の順序のコントロールから逸脱し，テクストの断片に注目し，テクスト内の他の断片にもテクスト外テクストの断片にもジャンプし，それぞれの関連性を考える読みの軽やかな自由がここにはある。ハイパーテクストによって読者が抵抗なく享受するこの読みの自由の感覚は，バルトが高らかに宣言し，示して見せた読みのあり方に他ならない。

バルトは，まず，テクストが記号が一本の鎖のようにつながったものではなく，記号が織りなすネットワークなのだという。

> In this ideal text, the networks are many and interact, without any one of them being able to surpass the rest; this text is a galaxy of signifiers, not a structure of signifieds; it

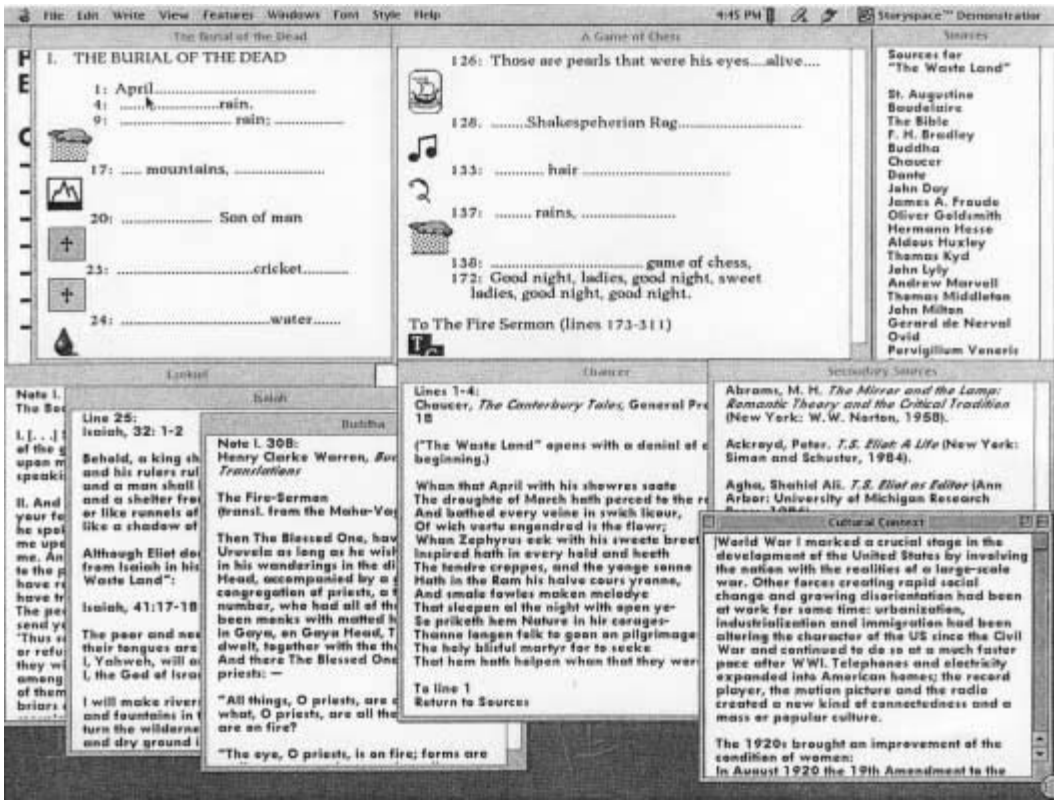

Fig.

has no beginning; it is reversible; we gain access to it by several entrances, none of which can be authoritatively declared to be the main one…[2]

この理想的なテクストにおいては，ネットワークが数多く存在し，相互に作用しており，いかなるネットワークも他のネットワークの上に立つことがない。このようなテクストは，記号表現（シニフィアン）の銀河であって，記号内容（シニフィエ）の構造物ではない。それは始まりを持たず，可逆的である。いくつもの入り口からそれに近づくことができ，どの入り口が主要な入り口であると権威的に断定することはできない。

バルトはテクストをこのようにとらえたうえでバルザックの「サラジーヌ」の分析手順を次のように説明する。

We shall therefore star the text, separating, in the manner of a minor earthquake, the blocks of signification of which reading grasps only the smooth surface, imperceptibly soldered by the movement of sentences, the flowing discourse of narration, the "naturalness" of ordinary language. The tutor signifier will be cut up into a series of brief, contiguous fragments, which we shall call *lexias,* since they are units of reading. [3]

したがって，われわれは，通常の読みによっては文章の流れや流れるような語り，普通の言語使用のもつ「自然さ」によって目に見えないように溶接された滑らかな表面しかとらえられ

ない意味作用の塊を，小地震のようなやり方で切り離し，テクストにひびを入れるのである。権威的に意味を押しつけてくる記号表現（シニフィアン）は切り分けられ，隣り合った短い断片の連続となるだろう。それを本書では「レクシ」と呼ぶことにしよう。なぜなら，それは読みの単位だからである。

バルトにとって，テクストを読むというのは，テクスト内で網の目のようつながった断片的シニフィアン（これをバルトは「レクシ」と呼ぶ）のリンクを選択し，意味作用を担っている諸コードを発見することである。*S/Z* で宣言されているのは，作者のコントロールから切り離されたテクストを能動的に読む「意味の消費者ではなく，意味の生産者」としての読者像だ。

Because the goal of literary work (of literature as work) is to make the reader no longer a consumer, but a producer of the text. Our literature is characterized by the pitiless divorce which the literary institution maintains between the producer of the text and its user, between its owner and its customer, between its author and its reader. This reader is thereby plunged into a kind of idleness — he is intransitive; he is, in short, *serious*: instead of functioning himself, instead of gaining access to the magic of the signifier, to the pleasure of writing, he is left with no more than the poor freedom either to accept or reject the text; reading is nothing more than a *referendum*. Opposite the writerly text, then, is its countervalue, its negative, reactive value: what can be read, but not written: the *readerly*. We call any readerly text a classic text.[4]

文学作品の（作品としての文学の）最終目標は，読者をもはや消費者ではなく生産者にすることである。われわれの文学の特徴は，文学という制度がテクストの生産者と利用者を，所有者と顧客を，作者と読者を無慈悲に引き裂くことである。こういった読者はある種の怠惰の中に投げ込まれている—彼は自動詞的である。要するに「お堅い」のだ。自分の機能を果たすのではなく，シニフィアンの魅惑，エクリチュールの快楽に近づくのでもなく，テクストを受容するか拒否するかという貧弱な自由しかもたされていない。こうなると読書は投票制度でしかない。書きうるテクストの対極には，その陰画的で反動的な等価物がある。読まれうるものであり，書きうるものではない。「読みうる」テクストである。読みうるテクストはすべて古典的テクストと呼んでいいだろう。

このように宣言した後，バルトはバルザックの「サラジーヌ」を断片に切り分け，それらを自由に接合して新たな意味の可能性を探る。バルト的な読みの態度とハイパーテクスト環境の親和性は，実は当然のことだとも言える。そもそも，ハイパーテクストは，その出自からして読者の能動性のために構想されたシステムだからである。ハイパーテクストという語は，テッド・ネルソン（Ted Nelson）が 60 年代に考え出した造語だが，ネルソンはハイパーテクストを次のように定義している。

"Well, by 'hypertext' I mean non-sequential writing-text that branches and allows choices to the reader, best read at an interactive screen. As popularly conceived, this is a series of text chunks connected by links which offer the reader different pathways."[5]

「ハイパーテクストという語で私が意図しているのは非順序的なエクリチュール—分岐し，

読者に選択肢を与え，インタラクティヴな画面で読まれるのがもっともよい読み方であるようなテクストのことである。一般に受け止められているように，これはリンクで結びつけられたテクスト群のことであり，このリンクが読者に異なった経路を与えてくれるのだ」

ネルソンが想定しているハイパーテクストの読者とは，まさにバルト的な読者なのだ。「サラジーヌ」に向かうバルトの読みの身振りをトレースするかのごとく，ハイパーテクストの読者もまた，作者＝書き手の語りの統語法からいったん自由になり，自ら選ぶ新たな統語法に基づいた断片の接合と再編成を行なう読者なのである。

読者の読みをテクストの意味を決定する権威としての作者の抑圧から解放することは，ポストモダニズムの読みの理論の中心をなすものだ。ハイパーテクストは，ポストモダニズムの提起した読みの自由，読者の能動性を見事なまでに支援するテクスト環境なのである。

作者の意図した読みの順序を無視して好きなところからテクストに侵入し好きなところへ瞬時にジャンプしてゆく読みの〈単線性（linearity）の否定〉と，シニフィアンからシニフィアンへと自由な移動をしてそこに新たな意味の可能性を探るための〈相互参照性〉，テクストのいったん定められた輪郭を流動化する〈非固定性〉，読むことと書くことの差異をぼかす〈可変性〉。そして異なったどんなテクストとでも結びつけられる〈間テクスト性（インターテクスチュアリティ）〉。これらはすべてポストモダニズムが提起したテクスト観そのものである。間テクスト性については，「あらゆるテクストは引用のモザイクとして構築されており，もう一つの別なテクストを吸収・変形したもの」だというクリステヴァ的間テクスト性[6]—たとえばデリダがヘーゲルとジュネのテクストを並べることでやって見せた〈読む行為の「場」のあらたな創出〉[7]—も，「エピステーメ」を構成する異種混交テクスト間の横断という，フーコー的・ニューヒストリシズム的な間テクスト性の概念もハイパーテクストは支援するだろう[8]。

このように，ポストモダニズムのテクスト理論を実践する場としてハイパーテクスト環境を捉えれば，必然的に次のような問題を回避することはできない。もし，マクルーハンの「メディアはメッセージである」というのがハイパーテクスト（ハイパーメディア）というデジタル・メディアについても当てはまる公理であるとすれば，また，テクストそのものとテクストの提示方法（つまりメディア）とそれを読む読者あるいは読者層はダイナミックな関係にあるというロジェ・シャルチエの読書の文化史についての考え方がデジタル・メディアのテクストの文化史についても言えるものならば，マクルーハンの「映像メディア」とシャルチエの「アンシャンレジームの書物の出版形態」がそれぞれオーディエンスや読者のメンタリティを変えるあるいは変えたように，デジタル・メディアは読者のメンタリティを変えてしまうかもしれないテクノロジーとなる。ハイパーテクストというテクノロジーがポストモダニズム的メンタリティを受容すると同時に社会のすみずみにわたりあまねく拡散・浸透させるということになる。

したがって，ハイパーテクストがポストモダニズムの心性の何を継承し何を継承しないのかという問題が検証されなければならないだろう。ハイパーテクストを評価するということは，ポストモダニズムに対するわれわれの評価と選択とは切り離されるべきものではないということだ。にもかかわらず，ポストモダニズムの嵐が過ぎ去った現在，われわれのポストモダニズムについての判断にはアンビバレンスがある。ポストモダニズムは，シニフィアンとシニフィエの間の安定した結びつきの幻想を暴くことで，記号＝ロゴスを中心として編成された形而上学的秩序，権力の階層構造の脱中心化をめざす思想である。記号の安定しているように見える意味作用が機能停止に陥る「アポリア」をテクストの中に見つけ，意味の決定不可能性を生むレトリックを分析し，ある場合はそ

の決定を拒む意味作用と対峙し，ある場合はそれと「戯れる」。意味を定める権威も主権もないということは，読みの果てしない可能性を許す豊かさであるのか。それとも，読みのアンカーをおろすべき場所を永遠に見いだせない虚無の中での漂流なのか。このアンビバレンスは，ポストモダン・テクストの実践環境としてのハイパーテクスト，コンピュータ，ネットワークという新しいテクノロジーのもたらすリテラシーの問題に対する態度にも継承されるはずだ。

ポストモダニズムに対しては，一貫して主としてポリティカルな観点からの強い批判がある。例えばテリー・イーグルトンは，ポストモダニズムの，一元主義を全否定する多元主義は，偽装された一元主義にしかすぎず，この無責任な自己矛盾を内在するリベラリズムがいわばモラルハザード，政治的文盲，歴史的無知を容認する幻想を振りまいていると厳しく批判する[9]。

デジタル・メディアがもたらす，まさしくハイパーな自由への解放をナイーブに称揚することは，社会主義的イデオロギー闘争における敗北にその源がある（とイーグルトンが考える）脆弱で誤りに満ちたポストモダン的リベラリズムの幻想の振りまきに謀らずも加担することになるかも知れない。そしてそれがポストモダニズムの仮に残滓であるにしても，われわれの集合的無意識に静かにしかし確実に沈殿し，後に強固な岩盤を形成するかも知れないのだ。

Alvin Kernan によるポストモダニズムと映像メディアに対するやはり強い批判[10]，Sven Birkerts のコンピュータテクノロジーによる印刷文化と伝統的リテラシーの破壊への嘆き[11]，Neil Postman による，ニューメディア・テクノロジーによる人間支配が招く人文的伝統の破壊とそれに伴う道徳の喪失への警告[12]。これらのニューテクノロジー批判とイーグルトンのポストモダニズム批判は，それぞれポリティカルな立場の振幅の大きさにもかかわらず，奇妙に共通していることは見逃せない。場合によっては，「伝統的」保守と「伝統的」革新双方からの批判の交錯するところに，ニューメディア・テクノロジーとポストモダニズムが位置しているともいえる。

もちろん，時代はポジティブな方向へと動いていると考えたい多くの現代人にとって，メディアの新しいテクノロジーが人間性の向上に資するはずだと考える楽観論のほうが受け入れられやすいというのも真実だろう。マクルーハンの「グローバル・ビレッジ（Global Village）」[13]，オングの「第二のオーラリティ（Secondary Orality）」[14] のように，この究極のメディアは，文明＝リテラシーの進化とともに離散・拡散してしまった人間性を再び結びつけ取り戻す力をもっていると考えることもできるだろう。

ハイパーテクストの生みの親，テッド・ネルソンは，地球規模のハイパーテクストネットワーク構想を Xanadu Project と呼んだが，それを実現しつつある今日のインターネット（World-Wide Web）は，ネルソンの考えていたように知の民主化による桃源郷（ザナドゥ）の到来に通ずる入り口なのか，それともこれまで人間が築き上げてきた知の枠組みの崩壊と人間性の重要な部分の喪失を招くものなのか。ハイパーテクストとポストモダニズムとの関係の考察は，われわれのこれからのリテラシーすなわち知のあり方を考えるうえで避けて通るわけにはゆかない問題なのではないか。

〈注〉

（1） Christiane Paul, *Unreal City: A Hypertext Guide to T. S. Eliot's The Waste Land* (Watertown, MA: Eastgate Systems, 1995).

（2） Roland Barthes, translated by Richard Miller, *S/Z: An Essay* (New York: Hill and Wang, 1974), p. 5.

（3） Ibid., p. 13.

（4） Ibid., p. 4.

（5） Ted Nelson, *Literary Machines, 0/2.* (1980)

（6） クリステヴァとデリダは，間テクスト性について次のように述べている。

「どのようなテクストもさまざまな引用のモザイクとして形成され，テクストはすべて，もう一つの別なテクストの吸収と変形に他ならないという発見である。相互主体性という考え方にかわって，相互テクスト性という考え方が定着する。そして詩的言語は少なくとも二重のものとして読みとられる」（ジュリア・クリステヴァ，『記号の解体学―セメイオチケ　1』東京，せりか書房，1983 年，p. 61）

"[I call a "text"] a differential network, a fabric of traces referring endlessly to something other than itself, to other differential traces. Thus the text overruns all the limits assigned to it so far…" (Jacque Derrida, "Living On: Border Lines." In *Deconstruction & Criticism.* New York: The Seabury Press, 1979, p. 84)

（7） Jacque Derrida, translated by John P. Leavey, Jr., and Richard Rand, *Glas* (The University of Nebraska Press, 1986).

（8） ニューヒストリシズムがいかに間テクスト性を前提とするものかは，Abrams による次の説明を読めば明らかだ。

In place of dealing with a text in isolation from its historical context, new historicists attend primarily to the historical and cultural conditions of its production, its meanings, its effects, and also of its later critical interpretations and evaluations. This is not simply a return to an earlier kind of literary scholarship, for the views and practices of the new historicists differ markedly from those of former scholars who had adverted to social and intellectual history as a "background" against which to set a work of literature as an independent entity, or had viewed literature as a "reflection" of the worldview characteristic of a period. Instead, new historicists conceive of a literary text as "situated" within the institutions, social practices, and discourses that constitute the overall culture of a particular time and place, and with which the literary text interacts as both a product and a producer of cultural energies and codes. [italics mine] (M. H. Abrams, *A Glossary of Literary Terms.* Fort Worth: Harcourt Brace, 1999, p. 182)

（9） Terry Eagleton, *The Illusion of Postmodernism* (Oxford: Bladkwell, 1996) における以下のごとき痛烈な批判を参照されたい。

One might redescribe this old-fashioned idea of immanent critique as, say, a 'deconstruction'. But this, in its newly fashionable forms, could only ever be a strategic skirmish or fleeting subversion, a rapid guerilla raid on the fortress of Reason, since for it to become systemic would be for it to fall victim to the very logic it threw into question. It would be a critique conducted more at the level of the mind than at the level of political forces; indeed one might understand it, in part as exactly such a displacement. It would be a Dadaist form of politics, wedded to the dissident gesture, in iconoclastic refusal, the inexplicable happening. (p. 8)

On the contrary, for all its talk of difference, plurality, heterogeneity, postmodern theory often operates with quite rigid binary oppositions, with 'difference', 'plurality' and allied terms lined up bravely on one side of the theoretical fence as unequivocally positive, and whatever their antitheses might be (unity, identity, totality, universality) ranged balefully on the other. (pp. 25–6)

For all its vaunted openness to the Other, postmodernism can be quite as exclusive and censorious as the orthodoxies it opposes. (p. 26)

It knows[postmodernism] that knowledge is precarious and self-undoing, that authority is repressive and monological, with all the certainty of a Euclidean geometer and all the authority of an archbishop. It is animated by the critical spirit, and rarely brings it to bear upon its own propositions. (Ibid., 26)

The political illiteracy and historical oblivion fostered by much postmodernism, with its cult of flashy theoretical fashion and instant intellectual consumption, must surely be a cause for rejoicing in the White House, assuming that the trend does not pass out of existence before it reaches their ears. (p. 23)

(10) Alvin Kernan, *The Death of Literature* (New Haven: Yale University Press, 1990).

(11) Sven Birkerts は，次のように述べている。

This "domination by the author" has been, at least until now, the point of writing and reading. The author masters the resources of language to create a vision that will engage and in some way overpower the reader; the reader goes to the work to be subjected to the creative will of another. The premise behind the textual interchange is that the author possesses wisdom, an insight, a way of looking at experience, that the reader wants .... A book is solitude, privacy; it is a way of holding the self apart from the crush of the outer world. Hypertext — at least the spirit of hypertext, which I see as the spirit of the times — promises to deliver me from this, to spring me from the univocal linearity which is precisely the constraint that fills me with a sense of possibility as I read my way across fixed acres of print. (Sven Birkerts, *The Gutenberg Elegies: The Fate of Reading in an Electronic Age.* New York: Ballantine Books, 1994, pp. 163–4.)

(12) Neil Postman, *Technopoly: The Surrender of Culture to Technology* (New York: Vintage Books, 1992).

(13) H. M. McLuhan, *Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man* (Toronto: University of Toronto Press, 1962) 及び *Understanding Media: The Extensions of Man* (London: Routledge and Kegan Paul, 1964) を参照。

(14) Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word* (London: Methuen, 1982) を参照。